

芥川だより

発行日 * 2025年9月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

ああ…無常にも、妻が逝く



9月2日、朝4時28分に妻は息を引き取った。5日ほど前から急に食べられなくなり、腹部の痛みを訴えだした。8月29日ごろから空咳も増え、痛み止めも効きにくくなる。

4年あまり前、乳がんが見つかりステージ4手前の厳しい状況で、主治医は私の余命の間に「5年ぐらいいかな？」と答えていた。子にも家内にも、それとなく余命が5年ぐらいいだと伝えた。家内には、残された人生を好きなように生きてほしいとたびたび言った。幸いにも同居していた家内の母が1年後に脳梗塞・認知症を併発して亡くなった。

家内は、家事以外の事は一切せず、友人たちとのグルメ巡りを楽しみながら、難波と梅田の書道教室にも通いいくつかの師範を貰い喜んでいて。書道教室を開く思いは無く、書道展にすらあまり関心がなく、あくまで趣味として楽しんでいた。

癌のことを忘れていたころ、検査で卵巣に癌が転移して急遽、兵庫医科大学で手術を受け、担当医の話では「今は、家内の体内には癌細胞が一つもありません」と言われて、家内は生き延びられるのではないかと期待していた。ところが癌は見逃してはくれなかった。最先端の治療と薬を続けても、一時期の安定した生活を与えてはくれたが、タイムリミットがあった。

家内は、体調が悪くもがいていても、自分がもうすぐ死ぬだろうという意識は全く無かった。私以外の家族にもそんな意識はなかった。幸いか不幸かしらないが、癌に対する知識不足から癌を甘く見ていた。逆にみんながわからずしまいに家内が息を引き取ったから良かったとも考える。しかし、私は医者より厳しく家内の容態を見ていた。すぐにでも救急車を呼び近畿中央病院の救急へ運ばなければならないと。予約は、翌日の月曜日だったが、私が我慢できず、早朝に救急車を手配し近畿中央病院に無理やりお願いし、入院した、翌々日の2日に亡くなった。なんとも早いバタバタの出来事だったが、私は冷静に対応出来たと思っているが、これからが大変だろうな。

死をめぐるあれやこれ (129)

母の死

石川 吾郎

私の母親は、もう十年ほど前に亡くなっているのだが、その最後の会話の場面が最近ふとしたときに記憶から湧き上がってくる。◆母は認知症で、まだ歩けるころに一度行方不明になった。大騒ぎになったのだが、半日ほどして母の実家があった愛知県の木曾川沿いの街の交番に保護されると連絡があり、京都から大急ぎで迎えにいった。私の実家から三十キロほど離れたところだったが、歩行器を携えてどうやってそこまで行けたのかは今になっても分からない。次の日から母は寝たきりの状態になった。それでもヘルパーさんたちの世話を受けて歌ったりして、自宅で結構楽し気に陽気に過ごしていた。◆私は遠距離介護で月に二回くらい岐阜市の実家に通っていた。ある日母がいよいよ衰えて私の食事介護でおかゆのスプーンを口に運んでいっても堅く口を結んで食べようとしなかった。その日は、ほとんど何も口にできなかった。私は思わず「食べないと死んじゃうよ」と強い言葉で言ってしまった。気がかりではあったが、食べてくれないまま、仕事があるので京都の自宅に帰った。次の日だった。訪問看護師さんから母親が亡くなったとの連絡が入ったのは。◆私は前の日の夕方に、なぜもとやさしい言葉をかけてやらなかったのだからと、悔いた。そして母親が最期になって食べるのを強い

意思をもって拒絶したのは、もう死を覚悟して、死と対話をしていたからだ。だからなのだろうか、今になってハッと気づいた。

素老人☆よもだ帳 (138)

坂本一光

◆過ちは繰り返します何度でも

そういうことを俳句も川柳も、何人もの人が詠んでいる。

歴史は繰り返すと言うけれど、歴史は神の意志によらず、また予めこうなると絶対的にどこかで決められているわけではない。歴史は結局は人がつくるものだから、過ちを繰り返すのは人である。個人または個人の集団としての人だ。それでは、なぜ、人は同じような過ちをくりかえすのだろうか、何度も思うことがあった。

そして、浅薄な結論ではあるが、その度に素老人の思いが行き着く先は、人生は一度しかないから、である。誰もが一回限りの人生を、初めて生きるのだから。「人生は一度」だけは、俗にいう能力の有無、権力や富の有無にかかわらず、万人に等しく与えられている。かつて陽水は「人生が二度あれば」と父と母のことを歌った。人生が二度あれば過ちはない、かもしれない。しかしその時、人が幸せであるかどうかは誰にもわからない。抗日戦勝利八十年を祝う中国からの報道があり、習近平と並ぶプーチン、金正恩の写真を見ながら、ここにトランプの姿を加えたら、いま人が繰り返している過ちの「仕上がり」だ、と思った。

生物学で昔学んだような気がする。生物は、例えばヒトなら、母親の胎内で受精卵からヒトに成長するまでの間に、進化の過程を一つずつたどっているという。個体発生は系統発生を繰り返す(専門用語でどうなのかは知らないが)、個人がヒトへの進化の過程を身をもって経験しているというのである。そして、存在するために人は生まれる。系統発生を経験したことはもちろん自覚できないが、次に、人は学ばなければならぬ。初めての人生を生きるために、である。系統発生という生物学的な進化過程に対応する人が学ばべきものは、人類の歴史の総体である。これもまた失礼な言い方であるが、歴史に学ばなければ人は闇の中を彷徨うほかない。権力を持つた人や国家が彷徨うとき、はた迷惑は破滅的になり、人類の存亡さえ左右する。そうならないために、何ができるだろう。一地方新聞の今朝のコラム「東西南北」を読んだ。

「君たちは、知っておかなくちゃいけないんだ。知っておかないと、また同じ過ちを犯すんだ」。恩師の言葉だという。後に同じ教職に就き「生徒に事実を語り伝えていくことの大切さ」を痛感したとの寄稿が心に刺さった。(大分県平和教育研究会編『おんなの太平洋戦争』)▼筆者は知らなかった。小学生時代を過ごした大分市戸次地区に海軍の秘密飛行場があ

ったことを。当時起こったあまたを。滑走路を造るために使った転圧ローラーは6年間通った戸次小学校のグラウンド片隅にあった。目にしていたはずだ。触れたこともあったか▼先の恩師は「無知であることは、恥ずべきことだ」とも述べたという。恥じた。そして忘れてはならない地元の大切な歴史を覚えていなかった自分に腹が立った。あるいは教えてくれなかった大人に。ローラーは、戸次本町ふれあい広場で戦争の記憶を現している▼同じ教職のさかか。「子どもたちに伝え続けなければいけない」。元同小学校長の広瀬孝三さんは、同校で平和授業を重ねる。事実だけを語る。誇張も主義主張もなく、児童の感性に委ねる。継ぐ▼過去が消えゆく。誤・偽情報が横行する。わたしたちは「事実」を知っておかなくてはならない。他人やネットの意見ではなく、自分の頭で考えなければならない。過ちを犯す前に。

それにしても人は、いつまで過ちを繰り返すのだろうか。人生が二度あっても繰り返すのか。そう言う私は、どんな大人でこの夏を過ごしているのか。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

芥川だより二四号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 129	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 138	坂本一光	2
哲学命いの時事放談 87	祖蔵哲	3
ボケ老人の雑話 17	明石幸次郎	5
オクラの山たより 108	因了生	6
隠された歴史 83	満田正賢	9
俳句	影山武司	12
編集後記	S K 生	12
ふみの道草 87	山椒魚	13

「哲爺い」の時事放談(87)

祖蔵 哲

抑止の哲学

9月になってもこの暑さは収まらない。気象情報はこのところ毎日、観測史上最高を記録したという報告ばかりだ。これも異常気象が続くと、地球温暖化の原因が何なのかも忘れてしまう。二酸化炭素

排出規制など持続可能な対策はもうすでに手遅れなのかもしれない。次は何が起ころのか。予想される間もなく、この異常な気象は確実に人間の行動にも大きな影響を及ぼしている。最近頻発する理由なき無差別殺人などはその典型例だろう。

世界規模でも人間の異常行動が起きている。戦争、紛争の異常性だ。その一つがガザで起きているイスラエルによる「ダブルタップ戦術」。ダブルタップとは本来IT用語で、スマホ画面などを二回コツコツ叩く画面操作のこと。それが戦争戦術用語になっている。先月末にガザ地区南部の病院で起きた空爆で、イスラエル軍は時間差で同じ標的を攻撃する「ダブルタップ」戦術を用いた。この戦術は被害拡大を狙って非戦闘員である報道陣や救助関係者などを巻き込む非法な攻撃手法で、シリア内戦での政府軍による空爆や、ロシアによるウクライナ侵攻などでも多用されてきているという。近

年の戦争は全く常軌を逸した、異常極まらない事態になってきている。さらに、国連機関の報告書によるとガザ市では80万人規模の飢饉が発生しているという。この原因がイスラエル軍による援助物資輸送を妨害だという。まさしくイスラエルは「ジェノサイド」を狙っている。イスラエル自身が過去に受けたこのトラウマは「虐待の連鎖」と呼ばれる世代間相続をしているのであろうか。

先月号でも述べたが「自国ファースト」の異常な高まりはその正当化のためには法や道徳はことごとく無視される。自分が決めたことだけが唯一の正義となるのだ。

さて、日本で毎年8月は「終戦記念日」いや「敗戦の日」を迎える。今年は戦後80年の区切り年。しかし、政府は歴史の区切りである「80年談話」は出さないうという。その理由が70年談話で前安倍総理が出した「謝罪外交」はこれ以後にしよという声明が根拠。世代間に過去の歴史の謝罪を引き継がせるのは適切ではないという。しかし、このような節目での表明さえ無ければいつの日か愚行は忘れ去られてしまうだろう。歴史に学ばない者は歴史に滅ぼされる。大いなる心配である。

さて、戦後80年といえば、原爆投下も80年前になる。広島、長崎で平和記念式典が行われた。人類における核兵器の使用は広島が最初で二番目が長崎では

なく、長崎は最後でありたいという願いはここでも望みが薄くなりつつある。ウクライナでプーチンは核兵器の使用をちらつかせている。さらにトランプはイランの核施設攻撃を広島・長崎の原爆投下を例にしてその正当化を述べた。世界の「異常」はとうとう現実的な自滅に向かいつつあるのか。今月はその核兵器について哲学しよう。

(1) 戦争は政治の手段

いまや人類は地球を破壊することができる程の核弾頭を保有していると言われている。アメリカは核分裂を戦争兵器として開発し、それを最初に使用した国だ。そのマンハッタン計画で開発者のオツペンハイマー自身がその破壊規模の恐ろしさに使用をためらった程の威力を示した。しかし、トルーマン大統領は原爆を広島に投下した。すでに降伏状態であった日本に核兵器を使用したのは、対ソ連、冷戦構造の始まりを見通しての国力誇示であるとも言われている。クラウゼヴィッツは『戦争論』において、戦争は他の手段をもってする政治の継続であると定義している。つまり、戦争は単なる暴力行為ではなく、特定の政治的目標を達成するための手段として使われるのである。その政治手段の最大、最強なのが核兵器なのだ。

(2) 核保有の既得権

核兵器は最終兵器であるという認識は広島・長崎で实际的に示された。それにも関わらずそれ以後ロシア、中国、イギリス、フランスは核兵器の開発を進め配備してきた。しかし、これ以上核保有国が増えると流石にまずいと思ったのかこの五か国は自分達だけ「既得権者」としてその保有を温存し、その他の国の開発を認めない都合のよい核拡散防止条約(NPT)を1963年に締結した。加盟国は主に「核の傘」で親分に守ってもらおうという子分たちである。しかし、北朝鮮は脱退して核保有国になり、インド、パキスタン、イスラエルなどは未加盟で核保有国である。このうちイスラエルは核保有を公言していないがアメリカの支援を受けて開発は完了しているとされている。

さて、これらの特権国条約に対して不公平感をもっている国々が成立させたのが2021年に発効した核兵器禁止条約(TPNW)である。核兵器を「非人道兵器」と位置づけ、その開発、保有、使用、使用の威嚇などを国際法のもとで全面的に禁止する条約である。唯一の被爆国である日本が参加していないので逆に有名になっている。その理由が例の「核の傘」に入っているからである。守ってもらっている親分に申し訳ないという発想である。同じ理由としてドイツ、カナダなども不参加である。NPTには3つの柱がある。一つが核保有国による核軍縮。もう

一つが非保有国への不拡散。三つめが原子力の平和利用だ。「平和利用」であれば、核兵器にも転用可能な高濃縮ウランを製造することが可能なのだ。そしてこの査察を担当しているのが原子力関連企業で構成されているとされる IAEA。NPT は根本的な「核廃絶」を推進する機関ではない。福島発電所の事故など言うまでもなく「核エネルギー」の利用自体が人類にとって脅威なのであることを再認識する必要はある。加えて言うところの核兵器禁止条約にも核の平和利用を禁止する条項はない。

(3) 核抑止の論理破綻

核保有国が主張する、その保有の正当化の根拠にあるのが「抑止効果」である。

つまり、保有国は自分が地球を破壊できる位の兵器を持っているということを示すことによって、相手の攻撃を思いとどまらせるという効果である。そもそも、「抑止」とは英語で「de-terrence」。

この言葉はラテン語の「怖がらせる」に由来し、あくまで脅しによって反撃をあきらめさせるという意味なのだ。

しかし、この理屈は問題点が多い。その一つが「合理性のパラドクス」だ。

核抑止理論の基本は『「核兵器を使うぞ」という報復の脅威によって相手の攻撃を思いとどまらせる』ことだと先ほど定義した。しかし、核兵器を使うことは非合理的（破滅的）なのに、使う意思がある

ように見せなければ抑止力が働かない。つまり、合理的な指導者は核兵器を使わないはずなのに、抑止力を維持するためには非合理的な行動を取る可能性を示さなければならぬという矛盾が生じる。

これを避けるために核保有の指導者は「狂気」を演じる必要があるのだ。現実には米国のニクソン大統領は、ベトナム戦争中に核兵器使用の脅しを何度も行い「自分は何をするかわからない狂人だ」と思わせることで降伏を迫った。「マッドマン理論」と呼ばれている。現代ではウクライナでのプーチン。イスラエルのネタニヤフがこれに相当するだろう。トランプ大統領はわざわざ演じなくても狂人であるからその必要はないのかも。しかし、この狂人そのものはなにをするか予想がつかない。抑止力自らが破滅を引き起こす可能性がある。

もう一つのパラドクスがある。それが「安定・不安定パラドクス」である。

核保有国が相互に核兵器によって抑止している状態では、大国の間には安定が成立する一方で、核兵器が使われる可能性が低くなるため、通常兵器による戦争が起こりやすくなり、世界が不安定化するというパラドクスである。核大国であるロシアと戦火を交え、核戦争になる可能性を避けたアメリカと NATO 諸国がウクライナへの派兵を控えたことで、ロシアの通常兵器による軍事行動を可能にする余地を与えたなど、世界で起こる地

域紛争は年々数を増しているように思える。

(4) 四人のジレンマ

さらに「ゲーム理論」によっても核抑止の機能不全は証明される。有名なゲーム理論「四人のジレンマ」を例に説明しよう。

A と B という二人組の泥棒が逮捕され、取り調べ官から別々に尋問を受ける。そこで各自は減刑するという司法取引を示唆される。両者が黙秘を続ける場合は一年の懲役。どちらかが裏切って各自認罪する場合、各自認罪する本人は司法取引により釈放になり相手は5年の懲役。そして、最後の選択は両者が各自認罪する場合。これは3年の懲役になる。

直接相談できない二人は当然、仲間だから、お互いに協力して自分からは各自認罪しないように最初は臨む。しかし、もしかして相手が各自認罪するかもしれないと恐れ、自ら各自認罪することを最後は選択してしまう。ジレンマが示すのは、最初に合理的に考えても、それがかえって非合理的な結果を生むという教訓だ。

「両者とも黙秘」は「核抑止ゲーム」でいえば、各国がお互いに協力して核兵器を使わない場合。「どちらかが裏切って各自認罪」は核兵器の先制攻撃だ。「両者が各自認罪」は文字通り最終戦争になる。四人のジレンマは、個人の利益と社会全体の利益が対立する「社会的ジレンマ」の一例

である。個人が合理的に選択した結果、社会全体にとっては非合理的な結果をもたらすことがあるという逆説（ジレンマ）を説明するものだ。しかし、「ゲーム」は繰り返し遊べるが、現実の核戦争ゲームはやり直しはできない。

(5) 絶対悪、タブーとしての核兵器そして核分裂

2024年ノーベル平和賞を受賞した日本被団協の授賞の主な理由は被爆者が国内外で地道に体験を証言し続けたことにより、核使用をタブーとする規範「核のタブー」の確立に貢献したとされた。核兵器が約80年間使われなかったのは、核抑止が効いているのではなく、被爆者の声が国際規範「核のタブー」として広がった結果ではないかと述べている。核抑止は「核兵器が使われないためにある」といつても、相手が撃ってきたら自分も使うということなので、核兵器の使用が前提になっている。核兵器が使われるリスクを下げるという意味では、先制不使用が一番いい具体的な政策だとは思いますが、これですら核使用を前提にしている政策なので、不十分である。緊張関係が高まれば、誤解や誤認識で核兵器が使われてしまうこともある。核兵器が存在する限り、核兵器は使われる可能性が残る。

根本問題は「核エネルギー」である。「核分裂」を利用する兵器利用は言うまでもなく平和利用でさえ、放射能漏れ、

核廃棄物など問題点が多い。要するに人類がコントロールできない事態なのだ。兵器になればなおさら制御不可能である。広島・長崎の原点に返り、福島も含め、やはり「核のタブー」を再認識しなければならぬ。

さて8月にちなんで今月は戦争の問題を取り上げたが、つい最近入ったニュースでトランプ大統領が国防総省を「戦争省」という名称に変更することを示唆した。それに伴い国防長官が「我々は守るだけでなく、攻めに出る。手ぬるい合法性ではなく、最大の殺傷力をもって。政治的な正しさではなく、暴力的な効果を目指す」と言っている。恐ろしい、常軌を脱した「マッドメン」。

ボケ老人の雑記(その17)

明石 幸次郎

この夏の暑さは、平均気温が過去30年の平均値を2.38度上回り、1898年(明治31年)の統計開始以来、最も高かったと言っています。9月に入ってから35

度以上の猛暑日が続く、京都では、今年54日目、奈良では47日目、大阪では42日目と危険な暑さが記録され、9月に入ってもまだまだこの暑さが続くようです。

気象庁によると、太平洋高気圧、チベット高気圧の張り出しが強かったという事らしいですが、この現象は、今夏だけでなくここ何年かは続いています。もう日本は亜熱帯か熱帯気候になったかの毎日の暑さです。インド、ベンガラ、インドネシア並みの暑さで、大阪、京都の夜の蒸し暑さはこれらの国以上ではないですか？

この異常気象は、気候変動の影響と云われて久しいですが、地球の気温上昇は2016年パリ協定の抑制目標の1.5度を超える勢いです。二酸化炭素削減の目標達成はこのパリ協定で温室効果ガスの2大排出国である中国とアメリカが同時批准して187か国も批准しましたが、今やアメリカトランプ政権がこの協定から離脱を表明し、来年1月には正式に離脱が予定されています。

アメリカは気候変動の研究においては、黎明期から色々な分野でリードしてきましたが、地球の気候をコンピュータ上で再現する「気象モデル」の研究も源流はアメリカにあり、地球観測衛星や主要な国際的な研究インフラはアメリカが中心となつて整備してきたと言われています。

ただトランプ政権になって以降、気候変動を巡る研究環境は変わりつつあり、

政府機関の米海洋大気局(NOAA)や米航空宇宙局(NASA)は予算、人員削減の影響を今や大きく受けています。

これは、トランプ政権を支えているブレーン、支持者の反科学や反知性主義的な考え方の広がりが必要の一つのようです。今のアメリカは科学者の理解と異なる情報、知識が平然と社会に拡がり、国の政策にまで落とし込まれるという異常なことが起きています。(江守正多さんによる。東京大学未来ビジョン研究センター教授。研究分野はコンピュータシミュレーションによる地球温暖化の未来予測)

気候変動の流れでは、例えば自然災害の増加に伴って移住地を追われる「気候難民」が増えると、特に発展途上国では食べていけないので、先進国に移住しようとする動きが加速する、現にヨーロッパ、アメリカでは気候、政治的混乱、戦争難民が増えて、その難民、移民排斥の雰囲気が強まると、自国最優先の政治勢力が人気を得て政権を取るようになってきています。こうした政権、政治勢力は気候変動を軽視する傾向があります。気候変動は各国が協力しないと解決しない問題ですが、国際協調しないアメリカのような自国優先国が増えれば、どうなることですか。

特にCO2排出量の多い中国、アメリカ、インド、ロシア、日本の5か国だけで世界の排出量の何と61%を占め、中国だ

だけで34%を占めて、CO2排出超大国です。アメリカと日本は今まで排出量が削減されましたが、中国、インド、ロシアは増加しました。しかし、トランプ政権になり、大幅に増加するのが懸念されています。

自国経済優先の国が増えると気候変動対策が後退して気候変動が加速して、砂漠化、海面水位上昇などで、気候難民が増えるという悪循環に繋がっていく、経済優先とか、戦争して領土を奪うロシア、イスラエルのような国が増えるとそれだけの国で自分たちだけ対策をしても意味がないと考えるようになるかも知れません。それで、いずれ世界全体が温暖化の進行を食い止めることを諦めてしまおう「臨界点」を迎えると、温暖化、熱帯化が限りなく進む未来が確定してしまいます。トランプ政権の誕生はそうした最悪のシナリオの入り口に立たされているようです。

トランプ政権のアメリカは、安全保障にしても、アメリカ一国で実現することが出来て、国際機関や同盟、従来の国際経済、貿易関係はアメリカの利益に資する範囲で自国の為に利用すべき手段とみられています。今までの国際秩序維持の為に負担してきたものは、他国の安全や繁栄の為に使われてきて、アメリカの国力、繁栄を毀損するものであり、今日のアメリカが抱えている労働者・中産階級の没落・薬物問題・不法移民・人種間対立等

の問題解決に役立たないばかりか、その解決を阻害していると、今までの政策を全否定し、自国優先のルールを世界に従わせようとしています。こうした考えと動きは整理され、体系化されたものではなく、情緒的で、主観的であり、この論点、争いでは反論や批判に耐えうるものではないようですが、アメリカの多数派の支持を得ています。また、気候変動はアメリカの富を奪う陰謀などと言われる考えも支持されているようで、気候変動への解決は更に、遠のくと言われ、これでは、これからの日本も孫子の代になり気候難民になるかも知れないと思うと、このボケ老人も心配になっている次第です。

このアメリカに代わり、最大の排出量の中国が、パリ協定を率先して順守し、世界の気候変動問題解決の為にリードをしていく国となるかは多いに疑問です。この国は国の政策があるとこの政策の裏を行くように対策を考えることに長けた、自国自分優先の「中華思想」の長い歴史のある国ですから。その前に、日本が合法的に中国人に気候変動の影響を免れせうな土地を占有されるかも知れません。

一

樋口家の女性三人が本郷菊坂町の家を引き払い下谷竜泉寺町三六八番地に家計のため商いをすべく居を移したのは一八九三(明治二十六年)七月二十日のことです。そこは間口三間、奥行き六間の二軒長屋の片方で六畳分の店のスペースのほかには五畳と三畳があり、敷金三円、家賃は一円五十銭の家でした。井戸はよい水が出ていいのですが深いのが難点で、風呂はありませんでした。

二軒長屋の壁一枚へだてた東隣は人力車夫の宿屋で人力を引く男たちが住んでいて、女所帯の樋口家を少しばかり不安にさせました。西隣は酒屋の伊勢屋。主人の鈴木兼三郎は空き家捜しの際に一葉と母親のたきが家賃を尋ねた人でもありません。

蛇足ですが、一円五十銭の家賃は樋口一家の生活水準から見るとやや高めといえました。横山源之助の「日本之下層社会」(明治三十二年刊)によると下谷万年町で「表に店を張れるは一円二、三十銭路地の家賃は七十銭」であったそうで、また最下層の人々の一ヶ月の生活費は十円前後(現在の二十万円ほど)でしたが、これは樋口家のそれと一致しています。家賃が割高であった理由は今度の家が

人の行き来が多い通りに面したからかもしれない。下谷竜泉寺町三六八番地の前の通りは茶屋町通りといって下谷から吉原遊郭の揚屋町非常門への一本道であり、山の手や日本橋方面からの近道にあたっていたため、吉原通いの人力車がひっきりなしに一葉の家の前を通りました。静かだった本郷の夜とはうって変わって夜の闇の中で人力車の音がひっきりなしに響きました。こうした状況を一葉は日記「塵の中」で竜泉寺町の最初の夜の様子として次のように書いています。

と自分を励ましている健気な戸主一葉の心持がよく見えます。しかし、此の地は京伝の洒落本「通言総籙(つうげんそうまがき)」にヤブ蚊が名物と書かれたほど蚊がよく出ました。それについて一葉は

蚊のいと多きところにて、藪蚊といふ大きなるが夕暮れよりうなり出(いづ)る。恐ろしきまでなり。「この蚊なくならんほどは、綿入れを着る時ぞ」とさる人いひしが、冬までかくあらんこと侘(わ)びし。

此の家は下谷より吉原がよひのただ一筋道にて、夕方よりとどろく車の音、飛びちがふ灯火の光、たとへんに言葉なし。行く車は午前一時までも消えず、帰る車は三時より響き始めぬ。もの深き本郷の静かなる宿より移りて、ここに初めて寝(い)ぬる夜の心地、まだ生まれ出でて覚えなかりき。家は長屋だてなれば、壁一重には人力ひく男ども住むめり。「商ひをはじめての後はいかならむ。其の者どももお客なれば、機嫌にさからはじと努むるにこそ。」廓近く人気(じんき)あしき処」と人々語り聞かせたるが、男気なき家の、いかにあなづられてくやしき事ども多からむ。何事もわれ一人はよし。不安ながらも「何事もわれ一人はよし」

と書いています。ヤブ蚊の多いことに一葉はかなり閉口したらしいのですが、この当時の竜泉寺町は現在の明るい町並みとはうって変わって「たけくらべ」に「かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋」とあるように、吉原遊郭に寄生するいわゆる「廓者(ぐるわもの)」や最も貧しい生活を送る人々が軒の傾きかけた長屋にひしめいている場所でした。一葉がこの地に暮らしたときの日記に「塵中日記」と名づけたのは決して文学的な比喩の命名ではなく、この竜泉寺の地が文字通りの「塵の中」の世界であったのです。

最初の日の日記は次のように結ばれています。

かくあやしき塵の中にまじはりぬる後、よし何事のよすがありて(「かの君が」が抜けている。「君」とは

座る暇もないほど忙しい店番を担当したのは妹の邦子でした。一葉は買い出し係です。一葉は安い仕入れ先を探してあちらこちらで買い出しをして重たい荷物を背負って家に帰るといふ毎日が続きました。家計を少しでも助ける意味で母親のときは吉原遊郭仲の町の引手茶屋伊勢久（引手茶屋とは吉原で遊び客を妓楼に案内したり遊女との仲介をしたりした茶屋のこと。仲の町の茶屋は吉原第一の茶屋とされた）から仕立物の内職をもらっていました。

店の客のほとんどは吉原遊郭に日々の糧を得ている人々の子供であり、内職の顧客も引手茶屋でしたから、この時期の樋口家の家計は吉原遊郭に寄りかかってきたといってもよいでしょう。

しかし、それでも家計は苦しいものでした。足りない分を補うための手段としては借金しかありません。一葉の家族がそれまで頼ってきた旧知の人々との借金はいわゆる「恩貸（おんかし）」というものでした。証文も書き、利子も払うということもありましたが、「生活のために貸す」という、あくまで厚意に裏付けられた借金で、期限が決められていたとしても「あるとき払い」で延滞分に利息が上乗せされるということはありませんでした。

しかし、商売のための借金となれば違ってくる。近代の契約という関係の借金となります。十二月に一葉は母方の従兄妹で個人的な金融業をしていた広瀬伊

三郎に五円を借りますが、俗に「日済し（ひなし）」という高利がつかまりました。「日済し」とは貸し付けた当日から利子が付き一日ごとの返済をさせることで高利の利子を取るやり方です。たとえば一円を借りて四十日で返却すると一日に払うのは三銭ずつなので四十日では一円二十銭を返すことになり利子は二割となります。これには一葉もビククリして「かかること、物覚えてはじめての事なり」と日記に記しています。血筋の縁、旧知の縁などが一切介在しない冷徹な資本の論理です。商売を始めることによって一葉は無情な近代の資本の論理の厳しさを味わうことになったのです。

四

ひつきりなしにやってくるお客の相手をする邦子。金策に頭を悩ませながら安い仕入れ先を探して品物を運ぶ一葉。吉原の引手茶屋からの注文を受けて仕立物に精を出す母親とき。三人が奮闘してなかなか生活は上向きにはなりません。時代の一葉一家の生活ぶりはこの一語でまとめられるでしょう。

さて、竜泉寺時代は一葉にとつて貧苦と戦う時代であったのですが、一方で彼女に大きなものを残しました。吉原という場所と吉原遊郭に寄生して生きる人々の姿を知ったことです。それは小説「た

けくらべ」に見事に生かされています。しかし、「たけくらべ」の作者一葉は常に外部から吉原遊郭を眺めているだけでその内部についての記述はまったくしていません。それは一葉が実際に自分の目で見たものだけを「たけくらべ」の中で描き出しているからです。

一葉の店の前を通って吉原に向かう人力車は一葉が数えたところ一〇分間に七十五輛でした。一時間とすれば五百輛にものぼる大賑わいの吉原遊郭ですが、一般公開日である吉原三大行事、すなわち四月の仲の町の夜桜・七月から八月にかけての玉菊燈籠・九月の仁和賀（にわか）以外の時期には一葉たち一般の女性は吉原遊郭の内部には入ることはできませんでした。そもそも吉原遊郭は客である男と客に買われる女たちの世界です。その商売とは無関係な一般の女性たちは普段は吉原遊郭の中にはいることはできない。つまり一葉にとつて吉原遊郭という空間は目の前にその怪しげな姿を見せながら、外側から見ると見えない、ずっと閉ざされた闇に包まれた空間であったのです。

折しも一葉一家が龍泉寺にやってきたのは七月二十日。それはちょうど玉菊燈籠の時期でした。一葉と妹の邦子が見物に吉原遊郭に足を踏み入れたのは八月三日の夕刻のこと。その時の様子を詳しく日記に記しています。玉菊燈籠とは享保のころ非業の死をとげた名妓玉菊追善の

ために引手茶屋が軒ごとに華麗な燈籠をかかげて飾った行事のことです。

まず目にしたのは柄長の提灯を襟にさして心中物などを三味線にのせて語る三十過ぎとおぼしき流しの女性です。都都逸にある「ばかにしやんすな、昔は花よ、鶯鳴かせたこともある」といった風情で一葉は少しばかり哀れを感じます。意外なことに一葉の見えるところ多くの男たちは遊女屋の格子の外で見世を張る遊女を冷やかすだけの「素見（すけん）ぞめき」であり、格子の間から遊女たちが手を伸ばし「ちよつと一服」「あがれ」「あがる」と登楼を誘う声が盛んに聞こえてくるのですが、引手茶屋や妓楼に上がる客はほとんどおらず、仕立物で世話になっている引手茶屋の伊勢久ですらも「客の一人もなき夜もあり」と言っている始末。ただし吉原遊郭最大の妓楼であった角海老（かどえび）だけは大繁盛しているようだで一葉は書いています。

この日のちよつとした事件は吉原遊郭の大門近くで四歳ばかりの迷子を一葉たちが助けたこと。どうも両親は遊郭の華やかさや賑わいに目を奪われて子供とはぐれてしまったらしいのです。しかも迷子を両親に引き渡しても彼らからは何のお礼の言葉もなかったと一葉は「をかしく人もありけるものなり」と日記に書いています。

九月の仁和賀では移動舞台での翫間や芸者たちによる手踊りが行われ、特に十

五日には吉原のすぐ隣にある水道尻の検査場（梅毒の検査をする。吉原の遊女は週一回検査があった）で「勢ぞろひ」を行い、入場券を出して人々に見せました。日記には「母君切符を人にもらひて検査所に勢ぞろひ見にゆく」とあります。これら吉原遊郭の行事は、後に「たけくらべ」のなかで生き生きと描かれることになりま

す。
母親のたきが見物に出かけた仁和賀が終わった後、二週間ほど日記は書かれていません。おそらく日々の生活に追われててんてこ舞いしていたのでしょう。しかし、この二週間の間に一葉の内面に何らかの変化が起きていたようです。というのも日記が再開された十月九日、一葉は再び図書館に通い始めていたからです。

（二二日より晴雨とも日々図書館に通ひて暮らしけるが、今日はえ行か

で奥なる座敷に籠りて書を読む。
店は昨日一昨日の頃より売り高いと多くてなりて邦子の忙しきこと起居ひまなし。さるは近き所にもとより有りける家の我が家に売り負けて店を閉じけるが二軒あるよし聞けばそれが為めなるにや。さしも競い心などの有るにもあらず。おのずからに任せて商ふものから店をあづかる邦子に運といふものあればなるべし。

我は何事も打ち任せてさるべき所へ買ひ出しといふ事に行くほかは勘定も工夫も知らず。ただ二間なる家の奥にこもりて書を読み文をつくる。

店は二厘三厘の客むらがり寄りてここへもかしこへもと呼ばはる声、蟬の鳴き立つにもたとへつべし。障子一重なる我が部屋は和漢の聖賢文墨の土来たり集まつて仙境をなす。塵中に清風を生じ清風おのづから塵中に通ず。わが浮草之舎も又一奇ぞかし。

（「塵中日記（甲種）」明治二十六年十月九日）

「間口二間奥行六間」の狭い家の中で、「二厘三厘の客」がむらがる店、そこでは妹邦子が起居の暇なく働いているのですが、その店と障子一枚へだてて読書にふける一葉はその空間を「和漢の聖賢文墨の土」が集う「仙境」と呼んでいます。

うるさく騒ぐ子供たちを相手に懸命に店番に励む妹邦子の空間。読書の静謐の中に籠る一葉の空間。この二つの空間は同じ屋根の下にある空間ですが、全くの別世界です。静かに「仙境」にあつて読書にふける一葉。彼女には自分の内面が本当に求めているものが何であるのか、すでに迷いなく理解されていたのではないか。この日記の記述からはそのように読み取れます。

平田禿木がやって来て「来月の『文学

界』に必ず寄書なすべし」と告げたのは十月二十五日のことでした。その日の日記に一葉は「七月以来はじめて文海（文学に関わる人たちの世界のこと）の客にあふ、いとうれし」と素直にその喜びを記しました。

これを機に一葉は再び「書くこと」と向かっていきます。「書きたい」という切実な、そして理屈では語りえない強い思いが一葉を動かしたためたのです。彼女を悩ませた食べるための文学と真に自分の求める文学との葛藤を乗り越えて「奇跡の十四カ月」が始まるうとしていました。

隠された歴史（83）

満田 正賢

今回は、百済三書のうち、日本書紀の継体紀、欽明紀に引用された「百済本記」と雄略紀、武烈紀に引用された「百済新撰」の記述の内容を通じて、その背景に隠された歴史を考察しました。今回は、百済三書の中で最も古い史書である「百済記」の記事に取り組みます。「百済記」

は日本書紀の神功紀、応神紀の中にその引用文が出てきます。神功紀、応神紀の描いた歴史は四〜五世紀の日本と朝鮮半島の交流の歴史です。今回は「百済記」の引用箇所のみならず、神功紀・応神紀に描かれた朝鮮半島記事全体を丁寧に探っていきたいと思います。

皆さん、日本書紀の神功紀、応神紀の朝鮮半島記事と聞くと、「神功皇后の三韓征伐」というイメージを持たれるのではないのでしょうか。しかし神功紀、応神紀の朝鮮半島記事を見ると、実際には三つの時期の記事に分かれており、それぞれの記事が違う性格を持っているように見受けられます。その三つの時期の記事とは、神功・撰政前紀の記事と神功四十六年条から六十二年条まで連続して記載された記事、そして、応神紀の八年条、十四・十五・十六年条、二十五年条の各記事です。

まず、神功・撰政前紀における朝鮮半島記事の性格に触れます。神功撰政前紀とは、仲哀が仲哀九年二月に崩御し、翌年神功が武内宿祢等とともに近畿に向かつて、籠坂王・忍熊王を征伐して、十月に撰政として即位（神功元年）するまでの一年間のことです。このうち神功が朝鮮半島に渡ったとされるのは仲哀九年十月三日であり、十二月十四日には筑紫に戻って応神を生んでいます。

撰政前紀には、「一書曰く」という形でのエピソードの記述はありますが、本文には朝鮮半島での戦闘の記述がなく、新羅王は「すぐさま白旗を掲げて降伏した」とあります。また高麗、百済二国王は、

軍勢をうかがわせたが、とても勝つことが出来ないことを知り叩頭（こうとう）して申し上げ、「今から以後、朝貢を絶やしません」と言ったと記されています。

神功が朝鮮半島に渡った出来事については何らかの元伝承があったと考えられますが、朝鮮半島内の記述については、具体的な史実は語られておらず、単に「三韓の王がこの時から日本の臣下となり日本に朝貢してきた」という歴史を創作しただけのことです。なお、神功・撰政前紀の記述には百済記の引用は出てきません。

次に、神功四十六年条から六十二年条までの朝鮮半島記事の内容です。神功四十六年条に斯摩（しま）宿祢を卓淳（たくじゆん）国に派遣したという記事が記され、そこから神功六十九年に神功が崩御するまでの期間の記述は、すべて朝鮮半島関連記事で構成されています。また神功四十六年条の直前の記事は、三十九年条（魏志はいう、景初三年・・・）、四十年条（魏志はいう、正始元年・・・）、四十三年条（魏志はいう、正始四年・・・）の各記事です。すなわち中国の三国志・魏志倭人伝に載った倭国の記事を受

けて朝鮮半島記事をスタートさせ、神功の崩御まで延々と続けているのです。この間の記述は、四つの記事に分かれています。

まず、四十六年・四十七年条の記事です。四十六年・四十七年条の記事は、斯摩宿祢が派遣された卓淳国を中継して、百済からの使者（久氏（くてい）・彌州流（みつる）・莫古（まくこ）の三人）と日本からの使者（斯摩宿祢の従者・爾波移（にはや））が日本と百済を相互に訪問する話と、新羅が百済の貢物を奪って新羅の貢物と偽ったことが発覚し、千熊長彦を派遣して新羅を責めた話です。千熊長彦は「百済記に職麻那那加比跪（ちくまななかにひくわ）といっているのはたぶんこの人であろうか」という分注があり、百済記を根拠にした記事であると想定出来ます。同時に「斯摩宿祢は、なんとという姓の人かわからない」という分注もあり、そもそもこの伝承が大和朝廷に残されていたものかどうかは疑わしいものです。

卓淳国は、従来は慶尚北道大邱付近（*新羅の都慶州に近い）とみられていましたが、田中俊明氏は、「最近の研究では慶尚南道昌原市（釜山・金海の近く）に比定されている」としています。（『日本書紀』朝鮮関連記事と百済三書』田中俊明、2021）

卓淳国の位置によって四十六年・四十七年条の記事のスケール感が変わります。

大邱付近の想定では、百済、新羅を包含した朝鮮半島全体を舞台にした創作的記事という印象が強くなります。一方、昌原市の想定では金官国（狭義の任那Ⅱ南加羅）に拠点を置いた倭国の交流記事としての具体性が感じられます。

次に、四十九年条の記事です。新羅を討つために日本が派遣した荒田別、鹿我（かが）別の將軍が木羅斤資（もくらこんし）と沙沙奴跪（ささなこ）に命じて軍勢を集め新羅を撃破し、加羅諸国を平定し、済州島を百済の領土にした話です。この記事は、四世紀末から五世紀初めの朝鮮半島の状況を記述している好太王碑文の内容とかみ合っており、従来は、倭国が加羅諸国を支配下に置いた経緯を記したものであるという評価がなされてきました。

しかし前述の田中俊明氏は、この記事が、全体を百二十年ずらして朝鮮半島の記述に合せた神功紀の中でさらに六十年後の出来事を挿入したものであるとみなしています。

又、金泰植氏は『四世紀の韓日関係史―広開土王陵碑文の倭軍問題を中心に―』という論文において、①広開土王陵碑文は、百済と新羅が昔から高句麗の属民として高句麗に朝貢してきたなど虚構に満ちたものであり、倭軍の記述も加耶軍の中の倭人の存在をことさら強調した虚構である。②当時の日本は鉄を生産しておらず、武器・馬具の類も朝鮮半島諸国に

はるかに劣っていた。③当時の日本は大和政権を中心にした首長連合であり、朝鮮半島との結びつきは鉄資源交易の維持を目的とするものであった。という三つの理由から、当時の倭国の加羅支配はありえないとし、神功紀の四十九年条記事を創作であるとみなしています。

次に、五十一年条、五十二年条の記事です。千熊長彦が百済から七枝刀など重宝を授かった話が中心ですが、七枝刀を下賜された話（*大和の石上神宮には百済王から贈られたと記されている七枝刀が伝わっています）と百済の西に鉄の産地がある話（*三国志東夷伝に弁辰が鉄を産し韓・濊・倭はここから鉄を手に入れている、という記述があります）が含まれており、これらの記事は史実に基づいたものであるかと思われず。しかし、その場合でも、千熊長彦については百済記に記された人物を大和王権の人物として描いたものであり、百済記の記述に、創作部分を付け加えたのであろうと考えられます。

次に六十二年条の記事です。新羅を討つために派遣された襲津彦（百済記では沙至比跪）が新羅に籠絡され、加羅国を討つた為、大倭の天皇が木羅斤資を派遣して加羅国を回復した話です。百済記が物語に引用されるのは、神功紀ではこの六十二年条記事のみです。引用記事は次

のようなものです。

*『原本現代訳日本書紀』山田宗睦訳文を用いました。

『百濟記』はいう。壬生年(三八二年)、新羅は貴国に貢上しなかつた。貴国は沙至比跪(さちひこ)を派遣して討たせた。新羅人は、美女二人に着飾らせて港に出迎え誘った。沙至比跪はその美女を受け取り、反転して加羅国を伐つた。加羅国王己本阜岐(こほんかき)とその子百久至(はくくち)・阿首至(あしゆち)・国沙利(こくさり)・伊羅麻酒(いらます)・爾汶至(にもんち)らは、その人民をひきつれて百濟に出奔した。百濟は厚遇した。加羅国王の妹既殿至(きでんち)は大倭に向かい申し上げて、「天皇は沙至比跪を派遣して新羅を討たせました。それなのに沙至比跪は新羅の美女を納め、新羅のことは捨てて討たずに、反つてわが加羅国を滅ぼしました。加羅の兄弟、人民はみな流離して、悲運に沈みました。まことに憂慮にたえません。それでいま来て申すのです」といった。天皇は大いに怒り、すぐさま木羅斤資(もくらこんし)を派遣して、軍勢を領いて加羅に集し、その社稷(しゃしよく)(国家)を回復した。」

神功四十六年条から六十二年条までの朝鮮半島記事全体を通して考えてみます。

この一連の物語に出てくる日本側の王は神功と応神であり、百濟側の王は肖古王と貴須王です。(近)肖古王の崩御は三十七年であり、この一連の物語は四世紀後半の朝鮮半島を舞台にしているのがわかります。

『枚方歴史フォーラム検証―古代日本と百濟』(大巧社、2003年)によれば、「百濟典型器種が日本列島に登場するのは五世紀後半須恵器のU3型式」ころである。この時期一時的に登場してまたすぐに出なくなる。ソウルにあった百濟の都漢城が四七五年に陥落した直後のころにほぼ一致する。」とあり、考古学的には四世紀後半の日本と百濟の交流の跡は見られませんが。

神功紀に記された四十六年条以降の記事をそれぞれ独立した物語であると考えると、六十二年条記事のみが百濟記に記された史実を元にしていて可能性が高く、その他の記事は、日本に残るわずかな伝承を六十二年条の記事と関連させて膨らませた記事、または創作した記事と言えるのではないのでしょうか。

次回は、今回触れなかった応神紀に記された朝鮮半島記事を分析し、その中に隠された歴史を探ると共に、神功紀・応神紀に引用された「百濟記」とその中に出てくる「貴国」について考えていきます。

俳句

影山 武司

竹叢のそよぎ始むる夕風鈴
開山祭富士の山肌雲が駆け
土用太郎視界はみ出す水平線
夏つばめ伊豆半島をひと跨ぎ
南風浴びて昼餉や大漁旗
サンダルの入選通知秋来る
公募展の入選通知秋来る
二の丸の歩廊の湿り秋の声
松明の火を借り点す迎盆
暁の空に富士ヶ嶺秋澄めり

◇13 ページからの続きです。

呑み込んだ愚痴をはき出す深呼吸 みつこ
魂も愚痴もかたちにして元氣。

枯れ切った脳を耕す広辞苑 浜子

「言葉なんかおぼえるんじゃないよなかつた」
と言う詩人(田村隆一『帰途』)。「日本語
とほんのすこしの外国語をおぼえたおかげで／ぼくはあなたの涙のなかに立ちど

まる／ぼくはきみの血のなかにたつたひとりで帰つて来る」。こんな誰かになつて、こんな詩人の殺し文句のような句が詠めたらいいなあ。言葉の力を信じます。

デジタルへ立ち往生のセルフレジ 美治代
デジタル化に右往左往のアナログ派。

春と云う言葉のひびき夢がある 久二夫
いつまでも春の小川はさらさらと。

コロナが又力をつけてやってくる ミヤ子
くり返す難儀に弱いヒト科ヒト。

富士山の初冠雪へ向くスマホ 憲子
「富士には月見草がよく似合う」と太宰が書いたのは、はるか遠い日。

秘密事鳥に話してあつげらん ふみ女
隠しても王様の耳ロバの耳。

年賀状もらつて嬉し筆書き 廣
直筆の温もりがいい年賀状。

心決め突進してはコブだらけ 幸子
走つても走る理由を忘れない。

太陽も地球も浮かぶ大宇宙 邦弘
大宇宙人の世に似て無駄がない。

流行に乗り遅れてももう平氣 和俊
もう平氣と年の所為ではなく言える。

何にでも美人を付けてほめ上手 カンナ
川柳を詠む人はみな美しい。

胸の底ひかるものありまた卒寿 喜代志

大切のものは心のずっと奥。

飾らない妻の寝顔に惚れ直す 勝美

ありがたいの心飲み込む胸の底。

孫の手から風がさらった綿帽子 みずえ

もうほかに何もいらぬ至福時。

夢を見た生きた証の出版を 澄子

生きて来た心のかたち五七五。

隣国の国民性を見るあのパワー 幹夫

五七五を斯く破調にしてみようほどに、閉ざされた闇の時代を忘れない韓国国民のパワーに圧倒された思い。

編集後記

S K 生

▲発行人である下村さんの奥さんが亡くなられた。詳細は巻頭言にあるとおりである。こうした大きな不幸があったにも関わらず、いつもに変わることなく原稿を寄せられた下村さんの強い責任感に敬意を表したい。▲人の死は悲しい。ましてや家族の死となるといっそうその悲しみは深い。文化文政期の俳人小林一茶は自分の娘とが二歳になったとき「這へ笑へ二つになるぞけさからは」とよんだ。五十六歳でやっとなぐさ抱くことのできた長女

だ。一茶は手放しに喜んだ。しかし、翌年、さとは痂瘡であつけなく死んでしまふ。「朝顔の花と共に、この世をしぼ」んだ娘。この悲しみを一茶は「露の世は露の世ながらさりながら」とよんだ。人の命ははかないものとは知るが、しかし、「さりながら」なのだ。死者は二度とよみがえることはない以上、残された者は死者の冥福を祈るほかはない。そして、生きる者の悲しみを癒やしてくれるのは時間だけだ。▲一茶よりも一世代前の俳人に蕪村がいる。亡き妻を偲んだ句をよんでいる。「身にしむや亡き妻の櫛を聞（ねや）に踏む」。亡くなった妻の櫛を寝室で踏んだ一瞬に感ずる悲哀。独り寝をかこつ悲しみ、妻と過こした思い出、残り少ない余生への不安、あれやこれやの思いが一挙に湧いてくる句だ。死者が思い出の中で様々な思いをかき立てる。そういう意味では死者が心のどこかに記憶で残っている限りはその存在は消えてはいない。▲最後に一言お断り。実を言えば蕪村の妻は彼の死後も弟子たちに助けられて生きている。「やられた」と思っではいけない。むしろ亡き妻への思慕を架空のことながら一句にしあげた作者の力量を認めなくてはなるまい。



ギボウシの花



リコリス

五七五を読む ― 十七音の響き方②

風向きを愛えてみようか回れ右 羊子

袴田さんの姉さんの一途さ。法天秤揺れて判決多数決、の現実。

思い出を肴に通夜の茶碗酒 十竜

回れ右してみようかと風を読む。

そつちにも酒はあるかと友想とう。

差し向かい子は父を真似左箸 カヨ

推敲の一字で駄句が日の目みる 幸

流動の世界へ告げる平和賞 孝子

今年又施設の部屋で年を越す 忠

大人だって。鏡見て左右どつちと迷う歳。

推敲の眠りの中で句は育つ。

抑止力が死語とならねば戦争も核も平和も死語とはならぬ。

晋一郎

「背番号1のあの人にだって／眠れない夜があつただろう」という、思いもかけない英五の歌に励まされたことがありました。

歳。

仕事ではライバル酒じゃ無二の友 春美

一年の没句すべてを振り返る 幸一郎

白黒を有耶無耶にして場が和む 秋子

朝日湯で命の鼓動よみがえる 百子

ライバルが無二の友だと言う誇り。

雪見酒麦米芋に序列なし 泰光

デジタル化白黒つけて青ざめる。カラオケで沈んだ気持ち晴らす歌 千恵

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

夜勤明けこれから他人の朝を寝る 千六

九割のカロリーはまだ酒の中。 火矢が飛ぶ松明目指しまつしぐら 幸輔

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

説明の無い語でニュース何語る。いい天気私が私を呼んでいる 春子

朝講義なければ徹夜実験も。

ふるさとを想う心のまつしぐら。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

ふてほどは老いには解せぬ流行語 いぶき

組板がひと日の暮し見届ける 菊江

偉そうに生きて知らないことばかり 喜一郎

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

空気が私を呼んでいる。空気水土の恵みに生かされる。道端の見られぬ草も花咲かす 春美

生きるとは食べることだと仕舞う今日。

知らないということを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

満月にやさしさ見つけ思いやり 正彦

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

無器用な私を笑う冬の月 静子

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

ひたひたに思い湛えて昇る月。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

本能の気づきが勝負の根っこ みちる

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

もの知りもことばの綾も響かない。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

ここからは射撃場あり通れない 昭三郎

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

日本の中に異国がある不思議。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

温暖化秋はないかと虫も泣く 信一

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

猛暑過ぎ秋は短く厳寒日 ひろむ

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

虫の目に涙四季から二季の国。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

風の子は見る影もないスマホ漬 俊信

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

考える輩もスマホにうかれる世。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

えん罪の白を信じた五十年 昌恵

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

また一人酒の友達いなくなる 季生

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦

◆以下は12ページに続きます。

知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。 知らないといふことを知る年になり。

魂をかたちに変えて湧くちから。子の苦勞見てるしかない親心 あつ子

転がったとこに住みつく石一つ(鶴子) 久々の抱っこでわかる成長度 敦